

## 2日目(12月7日):死んだ町へ

朝早く郡山から富岡町へ出発。東京の法政大学で翌日行われる会議に、ヴッパータール気候環境エネルギー研究所のペーター・ヘニッケと私が招待されたが、その法政大学の研究者グループが同行している。東京の新聞社数社の記者たちも同行している。富岡町は福島第一から10キロメートル離れたところにある。ここは福島第二原子力発電所の4基のうち2基が設置されている。バスで約2時間を要した。田舎らしい風景になってくる。村、また村。道中、富岡町の役場で働いていた人が2011年3月11日以後の様子を語ってくれた。正しい情報がなかったために、人々はどうすればよいのかわからなかった。電話は機能せず、暖房は切れ、ガスと電気は津波と原発事故直後に来なくなった。政府の退去命令は届かなかった。災害防止計画は不十分で、機能しなかった。機能したのはテレビだけだが、放送では原発大惨事は過小評価された。数日後、町会議員が家々を訪問したときには、多くの人間が自発的に逃げていた。何が起きたのかを理解できない人がいれば、わかっても逃げたくない人がいた。最後の住民が富岡町を退去するまで一年かかった。

1時間ほど走行した後、パーキングエリアで停車した。富岡町に入る前の最後のトイレ休憩である。公衆トイレは無料で、日本では普通に見られる暖かい便座とクラシック音楽の消音装置がある。最後のチャンスを利用する。たとえ消音装置がなくても。

車が進むにつれ、地面に置かれた大きな袋が見えてくる。除染された土を入れた袋だ。この袋は一枚17000円。平地には何百もの袋が置かれている。これらの袋が最終的にどこに持っていかれるのか、だれもわからない。

富岡町に到着。この間、私たちは防護服を着用した。連邦放射線防護局から借りた検定済みのガイガーカウンターを持参したが、カウンターの数値は0.6~1.9マイクロシーベルトの間で揺れている。私たちの車は止められ、特別許可証とパスポートの検問が行われた。富岡には誰もいないように見える。検査官以外は誰も見えない。多くの民家からは住民が慌てて立ち去った様子が見て取れる。自転車は壁にたてかけられたままだ。おもちゃは階段の前に転がっている。道路にはまだ車が放置されたままだ。町は無傷のように見える。地震や津波の被害はほとんどない。富岡町では自然災害の死者は6名にとどまった。しかし町は空っぽだ。住民たちが退去してから2年半が経ったが、自然が町を占領し始めている。以前はきっと手入れの行き届いた庭があったところに、膝丈の雑草が生えている。家の入口には立ち入らないように柵が置かれている。泥棒を防ぐためだろうか、それとも帰還者が入れないようにするためか。

車を降り、道路を歩く。ガイガーカウンターは2.6マイクロシーベルトに跳ね上がる。大きな黒いシートの下に土が置かれている場所に来た。富岡町とその周辺は除染のモデル地区となっていると聞いた。地面の表層部を削り取り、それを高価な保存用袋に入れるか、分厚いビニールシートの下に入れることで放射線量の低下が長期にわたるかを観察するのだ。富岡町出身のツアーガイドは、すべて無意味だと思っている。除染は膨大な費用がかかる、作業員は被ばくにさらされる、そして結局何にもならないと言うのだ。かつての町役場とその隣にある公民館に入る。ここもまた慌てて出て行った形跡がある。書類の山、コンピュータ、ガスマスク、干からびた鉢植えの植物が私の頭にある残像だ。コンクリートの壁で囲まれたスペースは0...の線量だった。自衛隊が何度もやってきて除染したということだった。ドアや窓を開けなかったため、線量が上がらなかった。以前この役場の職員だったガイドは、自分が働いていた場所を見せくれた。ここ

も、少し片づけさえすれば、すぐにでも仕事ができそうに見えた。隣の公民館にはかび臭い部屋があり、ここは15マイクロシーベルトだった。ここには汚染された水がたまっていた。

1時間ほど滞在した後、帰路についた。私の線量計は、私が2マイクロシーベルトを身に着けていることを示している。この死んだ町は私には警告の碑として刻みこまれた。2011年3月11日の福島原発事故5週間後、私は津波に襲われ、世界の破滅のように見えた仙台にいた。それは震撼させるものだったが、今感じているのとは違う。破壊は目に見えた、だからつかみどころがあった。しかし、ほとんど破壊されず、無人となったこの町では死が身近に感じられる。ここでは忍び寄り、つかみどころのない放射能を感じるようになる。ここで襲いかかってくるもの、それこそがまさに緑の党が存在して以来、原子力に対して戦い続ける理由である。